

『楊嶋暁筆』卷二十三「四獸与食道人」、「三獸与食老夫」をめぐって

小 椋 愛 子

一、はじめに

『楊嶋暁筆』は、巻ごとに表題を付すことが多く、各説話を、巻の表題に合わせて分類している。先に、各説話をその表題に合わせて形にまとめていることなども指摘したが、『楊嶋暁筆』は、各巻の中で、同類、同趣旨の説話を二話、もしくは三話並べてあげることも多い。そのような傾向は、巻九（似類上）、巻十（似類下）に顕著だが、他の巻でもその兆候は多く見られる。また、その二話、もしくは三話に対して別記の形式でそれらの説話に対する評、感想を付すなど、別記文を付すことで、二話、もしくは三話のまとまりが強調されたりもしている。よって、同類、同趣旨の説話を並べてあげることが、特別なことではない。しかし、巻二十三「四獸与食道人」、「三獸与食老夫」は、二話を並べてあげた後、「三獸与食老夫」の末尾に「此両説同異如何」と割り注をつける。これは、编者自身の判

断であり、注目するべき箇所であると思われる。また、『楊嶋暁筆』では、少し相違があっても、二話を全くの同話と编者が認めた場合には、一話としてまとめ、相違箇所を「異説」として、提示することも多い。この箇所は割り注を付しながらも、あえて二話を並べて載せており、注目される。よって、本稿では、巻二十三「四獸与食道人」と「三獸与食老夫」について考察したい。

二、『楊嶋暁筆』卷二十三「四獸与食道人」、「三獸与食老夫」の割り注について

巻二十三の「四獸与食道人」と「三獸与食老夫」の二話に付される割り注についてみていく。同類、同趣旨の話有二話、もしくは三話並べてあげる例は、先に述べた通り『楊嶋暁筆』中に、多数認められる。しかし、その類似点や異同に対し、疑問を呈する記述があ

るものは少なく、「四獸与食道人」と「三獸与食老夫」の例を含め、全体で四例のみである。また、割り注の形になっているものは、今回取り上げる例のみで、その他は、すべて、二字下げの別記文中での記述となる。それらは、次の三例である。

① 卷十(似類下)「七、魯連先生」と「八、嚙陽公」に対して、「八、嚙陽公」の後の別記文にある「此兩人日を還す事、同異尋ぬべし。……」の記述。

② 卷十(似類下)「二十、重姓比丘」と「二十一、薄拘羅尊者」に対して、「二十一、薄拘羅尊者」の後の別記文にある「今云、此両説の因縁の同異いかゞ。……」の記述。

③ 卷十(似類下)「二十一、竜樹菩薩」と「二十三、提婆菩薩」に對して、「二十三、提婆菩薩」の後の別記文にある「今云、予所持の両菩薩伝は高麗本金板也、然に両師の伝、南天竺の大王の問答はおなじ。不審云々。……」の記述。

①は、両話とも「戈」を用いて、沈み行く太陽を差し招く話。七の「魯連先生」は、魏の大將軍で、「趙」と戦った時の話。日は暮れていたのに、日中になったとし、そのことは「魏志に見へたり」とする。八の「嚙陽公」は、「楚」の大將軍で、「韓」と戦った時の話。戈で、日を三舎招き返したとし、「稽聖賦に見へたり」とする。固有名詞、出典ともに異なり、両話が別な話であることは明らかであり、それに対する記述となる。また、この後、仏家では、日を返す事は「俱舍等」の性相に背くとして、内容に異を唱える文章が続く。

②は、両話とも、魚に吞まねながらも死なず、福德を得る話。「重姓」と「薄拘羅」は訳の違いによるもので同一人物である。但し、魚に吞まれる状況、福德を得る因縁は全く異なる。「此両説の因縁の同異いかゞ。」は、それに対する記述であり、その後「然に末師は一のやうに釈する歟と覺たり。」と一解釈の提示へと続いていく。解釈の内容から、編者自身、二人を同一人物と知っていて敢えて別な話として二話載せていることがわかる。また、この両話も末尾にそれぞれ『賢愚経』第五、『付法蔵経』と出典の明記がある。現行の『賢愚経』と『付法蔵因縁伝』にこの話は認められる。

③は、竜樹菩薩と、提婆菩薩の説話であるが、南天竺の大王との問答箇所が、全く同文であるとして問題にしているもの。出典は、それぞれ「竜樹菩薩伝」と「提婆菩薩伝」である。「二十一、竜樹菩薩」の末尾に割り注で「竜樹伝、付法蔵経同之。」とあり、「二十三、提婆菩薩」では、南天竺の大王との問答以後を記さず、「以下問答竜樹伝同之、付法蔵経は心別なり」とする割り注を付す。ちなみに「予所持の両菩薩伝は高麗本金板也」とあるが、現行の「中華大蔵経」でもこの「竜樹菩薩伝」と「提婆菩薩伝」の南天竺の大王との問答は同文である。

いずれにせよ、この①から③は、全て「似類」の巻に収録しており、それぞれの出典を明記し、両話を類似した話形の別な説話と認めた上で、その内容についての同異を問題にしている。

今回取り上げる「四獸与食道人」と「三獸与食老夫」も、それぞ

れ出典を明記したうえで、異同を問題としているが、「似類」の巻ではなく、「雑」の巻に収録しており、疑問を呈する記述も割り注の形となる。先の①から③までと、位相を異にし、特殊な例と言えよう。よって、「四獣与食道人」と「三獣与食老夫」の特徴について検討したい。まずは、それぞれの内容を確認する。

三、「四獣与食道人」、「三獣与食老夫」について

この両話は、ともに「兔の捨身」の説話で、特に「三獣与食老夫」は「月の兔」の話として流布した話である。次にそれぞれの梗概をあげる。

「四獣与食道人」の梗概

- ①昔、年百二十才の梵志があり、深山に庵をたて、果蔬を食として、禽獣たちと数千余日を楽しんでた。
- ②狐、獼猴、獺、兔の四獣は、常にこの道人の経戒を聞いていた。
- ③しかし、そのうち、このあたりの果蔬を食べつくしたため、道人は庵を他所へ移そうとする。
- ④経を聞いていた四獣は悲しみ、道人の食べ物を自分たちで探し、供養し、なんとか道人に留まってもらおうと考える。
- ⑤獼猴は他山へ行き、甘果を取り、狐は化して人となり、飯麩を持って来て、一月の糧とした。獺は大魚を取り、これも一月の糧とした。

⑥兔は考えた末、我身をこがして供養しようと決意し、道人の前で、「我身を一日の糧に」と言い、火の中に飛び込む。

⑦道人はその志に感じ、哀傷して、そこに留まった。

⑧そのときの梵志(道人)は、提和竭仏、兔は我が身(釈迦)、獼猴は舍利弗、狐は阿難、獺は目連であると、仏は説いた。

「三獣与食老夫」の梗概

①却初の時、波羅奈国の林野に狐、兔、猿の三獣があり、ともに菩薩の行を行っていた。

②帝釈がこの三獣の心を試そうと、老夫の姿と化し、三獣に、自分分は飢乏しているため、食料を与えて欲しいと頼む。

③三獣は、それぞれ食料を探しに行き、狐は鮮鯉を、猿は木の果をとってきて、老夫に勧める。

④兔は、食料を探しに行ったものの、何も得られず還ってくる。そして、何も得ることができないため、自分自身を一食に当て欲しいとして、火の中に飛び込んで死ぬ。

⑤そのとき、老夫はもとの帝釈の姿になり、兔の灰を払い、骸をおさめて、傷愁する。

⑥帝釈は、月輪にこの骸をやどす。

⑦それ故に、月に兔がいるというのである。

両話を比較すると、布施を受ける対象者は異なるが、主題は「兔の捨身」である。登場する動物が、「四獣」では「狐、獼猴、獺、兔」、「三獣」では、「狐、猿、兔」と異なるが、四獣で「獺」が加

わるものの、その他は重なる。また、各々の行動を見ると、「四獸」の方は、獺が魚を取ってくるが、「三獸」では、狐がその働きを担う。それに伴い、「三獸」では、「四獸」の「狐」の行動へ人々として飯麩を持つてくること」は削除される。全体では、「四獸」は本生譚の形をとり、「三獸」の方は、兎の捨身を讀えて月に宿す、「月の兎」の故事になる。

このような相違はあるが、動物たちがそれぞれ布施をし、なかでも兎が究極の布施である「捨身」を行うというパターンは同じで、両話は、類似する。

「四獸与食道人」は、末尾割り注で「旧雜譬喻經下」と、「三獸与食老夫」は、冒頭で「又西域記七云」とそれぞれ出典の明記があるため、出典との関係を検討したい。また、この「旧雜譬喻經」、「大唐西域記」の記事は、『法苑珠林』卷四十一「供養篇」と卷六十四「慈悲篇」にそれぞれ引かれる。『楊鳴暁筆』中に、『法苑珠林』の書名は出典明記の形で、いくつかみられることから、原典でなく『法苑珠林』に拠る可能性も考えられる。よって、併せて比較する。

まず「四獸与食道人」から見ていく。比較表は、上から『楊鳴暁筆』、『旧雜譬喻經』、『法苑珠林』の順である。梗概①の箇所をあげる。

『楊鳴暁筆』「四獸与食道人」	『旧雜譬喻經』下 (四五)	『法苑珠林』卷四十一「供養篇」
----------------	---------------	-----------------

昔独の梵志あり。年百廿なり。少年より心に遙決なく深山無人の処に居して、茅をもていほりをふき、蓬を編て戸ぼそとし、菓蘆を食とし、財物をたくはへず、數千余日禽獸とともにたのしみり。	昔有梵志年百二十。少小不妻娶。無淫泆之情。處深山無人之處。以茅爲蘆蓬高爲席。以水果爲食飯。不積財寶。國王聘之不往。意靜處無爲。	又舊雜譬喻經云。昔有梵志。年百二十。少小不娶妻無姪泆之情。處在深山無人之處。以茅爲蘆。蓬菜爲席。以水果爲食。不積財寶。國王聘之不往赴意。
--	---	--

『旧雜譬喻經』と『法苑珠林』の異同に傍線を、その異同に対応する『楊鳴暁筆』の部分に波線を付した。網掛け部分は『楊鳴暁筆』が採らない部分。『楊鳴暁筆』は、梵志の様子、「不妻娶」を省略する形で、忠実に引く。ここは、どちらに拠るか不明だが、次の「茅をもていほりをふき、蓬を編て席とし、蘆をたれて戸ぼそとし、菓蘆を食とし、財物をたくはへず」は、「果蘆」の語を用いており、「以水果蘆爲食飯。」とする『旧雜譬喻經』に拠るといえる。次の網掛け部分「國王聘之不往。意靜處無爲」を、『楊鳴暁筆』は省略する。これは、この後、王に触れる箇所はないため、話の筋に不要であると判断したものか。次に、山中での様子、暮らした日数を述べるが、

於山中數千餘歲。日與禽獸相娛樂。(『旧雜譬喻經』)
於山數年與禽獸相娛絶於人路。(『法苑珠林』)

数千余日禽獸とともにたのしめり。(『楊鳴暁筆』)

と『楊鳴暁筆』は、日数も『旧雜譬喻經』の意を採り、また、「たのしめり」と、これも『旧雜譬喻經』の表現を採る。

梗概②、③、④の箇所、

時に狐と獼猴と獺と兔と此四獸、彼道人の前に來り、經戒を聞事、歲月積て久し。然るに諸の菓種みな食し畢てなければ、道人庵を他所へ移さんとせしかば、彼四獸大きに愁て申やう、「我ら各行めぐり食を儲て道人を供養し奉らん」とて、	有四獸。一名狐。二名獼猴。三名獺。四名兔。此四獸日於道人所聽經說戒。如是積久。食諸菓皆悉訖盡。後道人意欲使徒去。四獸大愁憂不樂。共相議言。我曹各行求索供養道人。	山有四獸。一名狐。二名獼猴。三名獺。四名兔。此四獸日於道人所聽經說戒。如是積久。食諸菓皆悉訖盡。後道人意欲徒去。四獸大愁憂情不樂。共相議言。我曹各行求索供養道人。
--	--	---

この部分は、『旧雜譬喻經』と『法苑珠林』では、傍線部のような異同があるが、些細であり、『楊鳴暁筆』が、どちらに拠るかは明らかではない。

『楊鳴暁筆』は、山を去ろうとする道人と獸たちの様子など、わかりやすくしながらも、原文の語を極力用いる。

梗概⑤の動物たちの行動の箇所、

獼猴は他山に至り、菓を取て來り、狐は又化して人となり、一瓠の飯麩を求めて、一月の糧にあて、獺は又水	獼猴去至他山中。取甘果來以上道人。願心莫去。狐亦復行化作人。求食得一瓠飯麩來。以上道人。可給一月糧。	獼猴去至他山得甘果來。以上道人。願止莫去。野狐行化作人。求得一瓠飯麩來。以上道人。可給一月糧。願止
---	--	---

に入て大魚をとり、是も一月の糧として、願はくは愛に留て他所へ移り給ふべからず」とぞ。

願止留。獺亦復入水取大魚來。以上道人。給一月糧。願莫去也。	莫去。水獺亦復入水取得大魚。以上道人。給一月糧。願止莫去。
-------------------------------	-------------------------------

ここも、『旧雜譬喻經』と『法苑珠林』に、異同はあるが、些細であり、その意味するところは同じ。獼猴が甘果を「取」るか「得」るか、「狐」と「野狐」、「狐亦復行」と「野狐行」の「亦復」の有無、「獺」と「水獺」の表記等の相違のみである。『楊鳴暁筆』は、獼猴が甘果を「取て」、「狐は又化して」、「獺は」等としており、『旧雜譬喻經』の表現に類似するため、ここは『旧雜譬喻經』に拠ることが、明らかである。

梗概⑥、⑦の兎の行動とその後の道人の行動の箇所、

其時兎思はく、「我は又何をもてか道人を供養せん。しかじ我身を火に入、身をこがして供養せんには」とて、即道人の前にいたりにし給へ」とて、みづから火中に身を投ぎ。道人其志を感じ哀傷して留り給へり。	兎自思念。我當用何等供養道人耶。自念。當持身供養耳。便行取樵以然火作炭。往白道人言。今我爲兎最小薄。能請入火中作爨。以身入道人。可給一日糧。兎便自投火中。火爲不自然。道人見兎感其仁義。傷哀之則自止留。	兎自思念。我當用何等供養道人。即念當持身供養。便取樵以燃火作炭。往白道人言。今我爲兎。請入火中作爨。以身奉入道人。可給一日糧。便自投火中。火爲不自然。道人見兎。感其仁義。哀愍傷之。則自止留。
--	--	---

ここは、『楊鳴暁筆』が採らない箇所に注目したい。すなわち、兎が自身の身をもって供養しようと思ったあと、燃料を集めて火をお

こしたとする「便行取樵以然火作炭」、兎が火中に身を投げた後、火は燃えなかつたとする「火爲不然」の箇所である。ここは、『旧雜譬喻經』、『法苑珠林』共に異同はなく、どちらも兎は死ななかつたとする解釈に違ひはない。原典では、兎は助かるが、『楊鳴暁筆』は敢えてその箇所を採らない。死を積極的に述べることもしないが、話の流れから兎が死んだことを推測させる。これまで、『旧雜譬喻經』の表現を用いながら、原文を忠実に引いていたことを鑑みると、この省略は意図的と思われる。『楊鳴暁筆』編者にとって、「捨身」とは、生命を犠牲にすることであり、「捨身」を成し遂げるには、兎は死ななかつたといけないという觀念があつたのではないか。また、兎が死ぬことで、「捨身」の尊さを強調していると思われる。

梗概⑧の箇所は、それぞれの本生を述べる。

<p>仏説宣はく、其時の梵志は提和竭仏是なり。兎は我身是也。獼猴は舍利弗、狐は阿難、獺は目連なりといへり。 旧雜譬喻經下</p>	<p>佛言。時梵志者提和竭佛是。時兎者我身是。獼猴者舍利弗是。狐者阿難是。獺者目捷連是也</p>	<p>佛言。爾時梵志者今提和竭佛是。爾時兎者今我身是。爾時獼猴者今舍利弗是。爾時野狐者今阿難是。爾時水獺者今目捷連是也</p>
--	--	---

三者とも、それぞれの本生は同じ。『旧雜譬喻經』と『法苑珠林』の異同を見ると、『旧雜譬喻經』は「梵志」と「兎」に対しては、「時梵志者」というように「時」をつけるが、「狐」「獺」に関して「時」を付さない。『法苑珠林』は、四獸全てに対し、「爾時」を付し、「梵志者今提和竭佛是。」というように「今」を強調する。ま

た、先の箇所と同じく狐を「野狐」、獺を「水獺」と表記する。また、「目捷連」を「目連」とする。

『楊鳴暁筆』は、「其時の梵志は提和竭仏是なり。」とするが、他は「兎は「獼猴は」とし、「今」をも付さない。『旧雜譬喻經』に近い。但し、同一人物ではあるが「目捷連」を「目連」と表記しており、どちらに拠るかは明らかでない。

以上、三者を比較した。『旧雜譬喻經』と『法苑珠林』の異同は少ないが、細かな点から『楊鳴暁筆』は、出典の通り、『旧雜譬喻經』を基にし、全体的には原文に忠実であると言える。但し、原文の「火爲不然。」を採らず、生命を犠牲にする「捨身」を強調する。これは、編者の持つ「捨身」のイメージの表れと言える。

次に「三獸与食老夫」について検討する。これも、『楊鳴暁筆』と、出典明記されている『大唐西域記』と、それを引く『法苑珠林』の三者で比較する。『大唐西域記』は巻七の「婆羅痾斯國」の条、『法苑珠林』は巻六十四の「慈悲篇」にこの説話を所収する。冒頭を比較すると、

烈士池西有三獸宰堵波。是如来修菩薩行時燒身之處。

（『大唐西域記』）

唐奘法師行傳云。婆羅痾斯國內有烈士池。池西有三獸塔。是如来修菩薩行時燒身之處。

（『法苑珠林』）

と、『大唐西域記』は、「婆羅痾斯國」の説明の一つとして「烈士池」の「西」に建立されている「三獸宰堵波」の由来を説く設定で、こ

の地は「如來修菩薩行時燒身之處。」であると説明する。『法苑珠林』は、「唐裝法師行傳云。」としており、これは、『大唐西域記』を指すと思われるが、その後、「婆羅痾斯國內」と、国名を補う形で『大唐西域記』に記載の状況を説明する。

『楊鳴曉筆』は「又西域記七云」と、冒頭に出典を明記するのみ。「又」と前話とのつながりが強調される。しかし、梗概①②の箇所、いわゆる菩薩行をしていた狐兔獾の所へ姿を変えた帝釈天が来る場面で、「波羅奈国」（次表、点線囲みの箇所）と国名を補う。「婆羅痾斯国」、「波羅奈国」では表記は異なるが、これは、Branasiの訳で同一の国を指す。この音写の方が、日本では流布していたか。表をあげる。

『楊鳴曉筆』「三獸与食老夫」	『大唐西域記』卷七「婆羅痾斯国」の条	『法苑珠林』卷六十四「慈悲篇」
劫初の時、波羅奈国 ¹ の林野の中に狐兔獾の三あり。ともに菩薩の行をたもつ。帝釈是を心みんが為に、形を老夫に化し、三獸に語て云、「我老弊を忘れて、遠く爰に來れり。故に飢乏せり。何をもちか饋食せん。」	劫初時於此林野有狐兔獾異類相悅。時天帝釋欲驗修菩薩行者。降靈應化爲一老夫。謂三獸曰。二三子善安隱乎。無驚懼耶。曰涉豐草遊茂林。異類同歡既安且樂。老夫曰。聞二三子情厚意密。忘其老弊故此遠尋。今正飢乏何以饋食。曰幸少留此我躬馳訪。	昔劫初時於此林野。有狐兔獾。異類相悅。時天帝釋欲驗修菩薩行者。降靈應化爲一老夫。謂三獸曰。二三子。善安隱乎。無驚懼耶。曰涉豐水草遊戲茂林。異類同歡。既安且樂。老夫曰。聞二三子情厚意密。忘其老弊。故此遠尋。今正飢乏。何以饋食。曰幸少留此。我躬馳訪。

『大唐西域記』と、『法苑珠林』は、同文。二重傍線部は、『楊鳴曉筆』が原文の語を用い、意をわかりやすくしている箇所である。網掛け部分は、『楊鳴曉筆』が採らない箇所。老夫と動物らの問答部分だが、『楊鳴曉筆』は老夫の言のみを採る。三獸が、自分たち三匹は心を和して安穩であること、三獸が食料を探してくるため、少し留まっているよう申し出る部分は全て省略し、老夫の要望のみをまとめている。

時に三獸志を合せ、路を分ていとなみ求む。狐は水浜に隨て一の鮮鯉をくはへ來り、獾は林樹よりあやしき菓をとり來て同老夫にすむ。	於是同心虛己分路營求。狐沿水濱銜一鮮鯉。獾於林樹探異菓。俱來至止同進老夫。	於是同心求覓。狐沿水濱銜一鮮鯉。獾於林樹探菓。俱來至止
---	---------------------------------------	-----------------------------

『大唐西域記』と『法苑珠林』で、表現に異同がみられる。傍線部が異同箇所。また、それに対応する『楊鳴曉筆』の箇所に波線を付した。比較すると、『楊鳴曉筆』は、「路を分ていとなみ求む。」と「營求」を意識し、「あやしき菓」と「異菓」、「同老夫にすむ」と「同進老夫」を意識しており、いずれも『大唐西域記』に拠ることが明らかである。

続く梗概④の箇所（次表）、兔が帰ってきた様子も『楊鳴曉筆』は、「左右におどり」と『大唐西域記』の表現を踏襲する。『法苑珠林』に、この表現は見えない。次に示す。

は編者の考える理想の「捨身」の姿でもある。末尾に「此両説同異如何」の割り注を付すことで、読者に注意を促し、両話を強調し、より類似点を際立たせる。それは「四獸与食道人」が、「三獸与食老夫」の基と読者に思わせる効果を持つ。

通常、編者が同話、もしくは同源の説話であると判断した場合、基の説話をあげ、異説として相違点を付すなど一話として扱う。しかし、この両話の場合、同源の話か否か判断がつかなかったのではない。その理由として、この両話がどちらも仏典であること、そして、『法苑珠林』にも、巻を違えて別のテーマの話として収められていることがあげられる。

四、「兔の捨身」の説話

ここで、「兔の捨身」の説話について見ていきたい。『榻嶋暁筆』が引く話は、どういう位置にあるのか。仏典中、管見に入ったものは、登場する動物で、三つの型に分類できる。まず、四獸Ⅱ〈狐、獼猴（猿）、獼、兔〉が登場するもの。これは①『旧雜譬喻經』下・四五（呉の康僧会訳）、②『法苑珠林』卷四十一「供養篇」（『旧雜譬喻經』を引く）（唐の総章元年〈AD668〉成立。著者は道世）、③『六度集經』卷三第二十一（呉の康僧会 訳）の三話がある。次に三獸Ⅱ〈狐、獼猴（猿）、兔〉が登場するもの。これは、①『大唐西域記』第七「婆羅痾斯国」の条（唐の貞観二十年〈AD646〉成立。

『榻嶋暁筆』卷二十三「四獸与食道人」、「三獸与食老夫」をめぐって（小椋愛子）

著者は弁機）、②『法苑珠林』卷六十四「慈悲篇」（『唐奘法師行傳』〈大唐西域記〉を指すと思われる）を引く）、③『法苑珠林』卷四「月宮部」第四の割り注（「衣西國傳云……。」と、月輪の説明として先にあげた『大唐西域記』の話を引き。但し、記述は兔が捨身する箇所のみで他の動物のことにはふれない。）の三話だが、全て源は『大唐西域記』である。そして、兔のみが登場するもの。①『生經』卷四「佛說兔王經第三十一」（西晋の竺法護〈AD285〉訳）、②『菩薩本緣經』卷下「兔品第六」（五世紀の成立。著者は僧伽斯那。呉の支謙訳）、③『撰集百緣經』卷四第三十八「兔燒身供養仙人緣」（呉の支謙訳とされる）、④『雜寶藏經』卷二第十一「兔自燒身供養大仙緣」（二世紀頃以降の成立だが、原典は散逸して不明。北魏吉迦夜と曇曜〈AD472〉訳）、⑤『一切智光明仙人慈心因緣不食肉經』（訳者不明〈四五世紀〉）、⑥『經律異相』兔十二「兔王依附道人投身火聚生兜率天一」（出典は『生經』）（梁の天監十五年〈AD516〉成立。著者は宝唱）⑦『菩薩本生鬘論』卷二第六「兔王捨身供養梵志緣起」（四世紀頃成立。訳者は宋の紹徳・慧詢等と記されているが、少なくとも四人以上の作業〈十世紀後半〜十一世紀初〉の訳）の七話。但し、その中でも兔が一匹であったり、兔の王で群れを率いているものなど、設定はそれぞれ異なる。

話もそれぞれに特徴があり並立しており、説話同士の相互関係は不明である。④「四獸」の話は、『六度集經』にもあるが、『旧雜譬喻經』と訳者が同じで、『旧雜譬喻經』と比較しても、異同は少ない。

但し、最後の本生を語る箇所の人物名の音写の表記が異なる。どちらも同じ内容だが、『楊鳴暁筆』は、『大唐西域記』、『旧雜譬喻經』、『雜譬喻經』、『賢愚經』等を、数多く引いているため、『六度集經』より『旧雜譬喻經』を用いたと思われる。

次に、日本の書物に見える「兔の捨身」について管見に入ったもののみだが、あげてみたい。

まず、古くは『今昔物語集』巻五・第十三「三獸行菩薩道、兔焼身語」。これは、『大唐西域記』が典拠とされるが、「西域記」に沿いながら動物が採ってきた果実の種類を具体的にあげるなど、典拠より詳細な説明がある。そして、末尾は、

然レバ、月ノ面ニ雲ノ様ル物ノ有ハ此ノ菟ノ火ニ焼タル煙也。

亦、月ノ中ニ菟ノ有ルト云ハ此ノ菟ノ形也。万ノ人、月ヲ見ム
毎ニ此ノ菟ノ事可思出シ。

と月の有り様にあわせ、月の兔の由来を強調する。また、『法華經直談鈔』⁽⁹⁾巻二本三十一「月兔事」に、「次、月中ニ有レ兔事玄奘三蔵、西域記「見^ツ」として『大唐西域記』の話を引く。但し、帝釈が月に菟を宿した後、「月、帝釈ノ内大臣^ヲハ彼菟ヲ預^リ月宮ニ置^ツ也 依^レ之月ノ中ニ菟有^レ之也」と月と帝釈との関係へと話が展開し、さらに、その後、三獸のいた迹に「率都婆」を建立したことを述べ、その時の菟が今の釈尊であるとす。『大唐西域記』は、本生を説かないため、ここは他の經典の「兔王」の説話に拠る。さらに同二十一には、兔のみ登場する「弥勒菩薩并兔仙人供養事」がある。冒頭、弥勒菩

薩の名前の由来を説明し、弥勒菩薩は、昔光明仙人であったとする。断食し、餓死しようとしていたのを五百の菟を率いていた兔王がみて、嘆き、仙人の食料になるため、火中に飛び込もうとする。光明仙人は、それを留め、その理由を聞き、悔いる。この時、二人の間に光明がさしたため、不思議に思った諸人が集まり、その故を聞き、仙人に供養する。この時の仙人が、釈尊、菟は弥勒菩薩であるとす。これは、『一切智光明仙人慈心因縁不食肉經』、『生經』などに拠るか。『生經』は仙人を「定光佛」とするが、「定光佛」＝「燃燈佛」で未來成仏の証を受ける佛である。これと弥勒菩薩が結びついたのではないか。また、この話は、『往因類聚抄』⁽¹⁰⁾、『八幡愚童訓』⁽¹¹⁾にもみられる。しかし、『八幡愚童訓』は末尾を月の故事でまとめる。『塵添盛囊鈔』⁽¹²⁾巻十四第一「月ノ中ノ兔事」(同話は『盛囊鈔』にも)には、

月ノ中ニ有^レ兔云云。就^レ之其ノ義多ケレ共。只過去ノ靈兔ノ白骨ヲ取テ。帝釋月中ニ置給^フ故ヘト云云。

とあり、続けて

玄贊要集ノ第十二云。問云。月中ノ兔何^ニ因^ツテ有ルゾヤ。答^フ云。未曾有經ニ説ク。波羅底斯國。烈士池ノ西ニ有^レ三獸ノ率都婆。一狐猿兔……

と『大唐西域記』の説の要旨のみを挙げる。出典を『未曾有經』としているが、『未曾有經』、『仏説未曾有因縁經』、『仏説未曾有正法經』等にこの説話は見られない。ちなみに、『説経才学抄』⁽¹³⁾にも「賛

ニ云、問：「……」に対して「答、未曾有経ノ説……」とする同類の問答がある。また、その後

又法苑珠林ニ云、依西國傳ニ云 過去有兔行菩薩行。帝

釋試云。索目欲食。捨身火中。天帝愍之、取其焦置

月中。令未來衆生知是過去菩薩行慈之身上。

として、兔の捨身の迹が、月の故事であることを簡潔に再度述べる。全体の内容も『大唐西域記』に類似する。さらに時代が下ると良寛の「月の兔」と題する長歌があるが、これも『大唐西域記』を源とする。

以上のことから、日本の書物では、『大唐西域記』を源に、「兔一匹」の本生譚の説話を融合させ、「月の兔」の由来に重点をおく形で、話が展開すると言える。日本の書物に「四獣」が見える例はない。『楊嶋暁筆』も『大唐西域記』と本生譚を並べるが、敢えて「四獣」と組み合わせ、「捨身」に重点をおく。組み合わせ自体、特異であると言えよう。

五、まとめ

以上、『楊嶋暁筆』の卷二十三「四獣与食道人」と「三獣与食老夫」について考察した。出典との関係については、類書からではなく、明記した書物から直接引いていることを確認した。また、大部分を原典に忠実に拠りながら、「火爲不然」や「兔を責める言」等

を、意図的に省略する事で、「捨身」のあるべき姿を強調し、両話を、積極的に自らの意志で「捨身」をするという枠組みで、意図的に合わせるような構成でまとめていることを指摘した。また、省略も一話の構成を考えての省略となっていることも指摘した。割り注「此両説同異如何」は、読者に注意を促し、両話の類似点を強調する効果を持つ。それを付すことで、両話の類似した枠組みをさらに際立たせていると思われる。

また、「兔の捨身」に関する和書の中に、「四獣」の話は管見に入っただ中では見られず、「四獣」と「三獣」の組み合わせが、特異である事を確認した。通常、月の故事の『大唐西域記』と、本生譚の顕著な「兔一匹」の組み合わせに対して、『楊嶋暁筆』は、敢えて「四獣」をとり、組み合わせを他と異にし、さらに、両者の類似点を強調する。

敢えて類似点を強調するのは、編者に、「四獣」が「三獣」の基だという意識があったからであろう。さらに、編者は「捨身」の理想の形の基をも「四獣」に見ていたのではないか。「四獣」では、何日か一緒に暮らした道人を助けたいという自分の欲から出た「捨身」の行為であったが、「三獣」では、誰であっても助けるために「捨身」をする、初めて会った者に対して、何の欲も持たず「捨身」をする。「四獣」に編者が理想とする「捨身」の行為の完成度に対する基を見ていたのではないか。そして二話並べること、完成度の推移を提示しているのではないか。

二話を別な話としてあげるのは、『法苑珠林』の影響が大きい。『法苑珠林』が、この二つの話を同話とせず、「慈悲編」、「供養編」と巻を違え、主題を異にする話として、両方とも所収していることから、同話とはできなかったであろう。

典拠からの採り方、また、割り注を付けるなど類似点を強調する形で二話をあげたのは、「似類」の巻のように同類の一对の話としてではなく、二話並べることによって「捨身」の行為に対する進化の解釈を求め、読者に自分の考える「捨身」の理想の姿を提示していると思われる。

注

- (1) 拙稿『楊鳴暁筆』の世界—〈別記〉の形式をめぐって—(愛知淑徳大学国語国文) 第25号・平成十四年三月)
- (2) 『楊鳴暁筆』巻二・第四「頂生王」には「法苑珠林云、四粒入鉢、領^マ四天下^ニ」、一粒、在頂、受衆二点矣。」とあり、巻十四・第十三「似我峰^ニ」は、本文中に「又法苑珠林には百年の雀江に入りて蛤となり、千歳の雉海に入て蟹となるとなり。」として、『法苑珠林』を引く。
- (3) 引用は『楊鳴暁筆』(中世の文学) 三弥井書店による。
- (4) 引用は『大正新脩大藏經』第四・本縁部下 による。
- (5) 引用は『大正新脩大藏經』第五三・事彙部上 による。
- (6) 引用は『大正新脩大藏經』第五一・史伝部三 による。
- (7) 仏典の解題は、『大藏經全解説大事典』(雄山閣出版)による。

- (8) 伊藤千賀子氏は「兔王本生」の諸相とその原形」(文藝と批評) 第六巻第三号・一九八六年三月)の中で、一五種類の説話の要点を七項目たてられ、「兔王本生」の基本は(1)(2)(5)であり、(筆者注(1)兔(2)仙人の飢渴(5)兔を食べる)であり、この三項目だけで成立しているものは「雜宝藏經」である。」として、「雜宝藏經」が最も古い形を伝えるものとみなせるとされている。また、項目(1)(2)(5)から、原形に近い形をまとめられている。また、伊藤千賀子氏は、「兔王本生」の諸相とその原型—日本語所伝を中心として—(文藝と批評) 第六巻第四号・一九八六年八月)で、肉食の観点から「日本で流布したものは、出家の肉食を禁じた大乘系統のものばかりということになる。」と述べられている。また、「八幡愚童訓」に月の兔が添えられていることについて「この作品が作られた頃、すなわち鎌倉時代には、日本には既に「月には兔が住んでいる」という話がかかり流布していたのではないかと推定されている。
- (9) 引用は『法華經直談鈔』一(臨川書店・一九七九年初版、一九八九年第三刷発行)による。
- (10) 『真福寺善本叢刊』第二巻『法華經古注釈集』(国文学研究資料館編・臨川書店・二〇〇四年)に所収。
- (11) 『寺社縁起』(日本思想大系20・岩波書店・一九七五年)による。
- (12) 引用は『大日本佛教全書150』(名著普及会・一九八三年覆刻版一刷、一九八七年覆刻版二刷発行)による。但し、浜田敦・佐竹昭広編『塵添瑠璣鈔・瑠璣鈔』(臨川書店)をも参照した。
- (13) 引用は、『真福寺善本叢刊』第三巻『説経才学抄』(国文学研究資料館編・臨川書店・一九九九年)による。

〈付記〉

*本稿は、日本文学協会第二九回発表大会・中世部門(静岡大学・平成二十一年七月)の、口頭発表に基づくものです。席上、諸先生方に数々のご

教示・ご指導を賜りました。明記して感謝申し上げます。

『榻嶋晁筆』卷二十三「四獸与食道人」、「三獸与食老夫」をめぐって（小椋愛子）

二五